



四季類  
 能楽素時記新葉草  
 冬







萬回の二葉の中法中の身 尚白  
びつわりの如く 月夜 月夜  
心ゆくゆくゆくゆくゆくゆく

兼月やまのぼる月 千子  
三月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月と兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

元福の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月

兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月  
兼月の月 兼月の月 兼月の月



つ子に子の子をよめし極のそ世  
度蓋や作りたふ事結新の事  
及控るる極うらぬ極極う極  
月何くの極極極極極極極極

入事の極極極極極極極極  
或は極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極

辛未のく一極極極極極極極極  
ひ志まらまらりらるる極極極極  
向者とりりりりりりりりりり  
車の中思思思思思思思思思思  
極極極極極極極極極極極極極極  
夢と極極極極極極極極極極極極  
まきまきまきまきまきまきまき  
まきまきまきまきまきまきまき

て居る極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
く極極極極極極極極極極極極極極  
し白大極極極極極極極極極極極極  
まきまきまきまきまきまきまき  
が極極極極極極極極極極極極極極  
事極極極極極極極極極極極極極極  
ハ大井川の白の極極極極極極極極  
園女極極極極極極極極極極極極極  
冷したり是亦回極極極極極極極極  
の二句を一向極極極極極極極極極  
意いつん去来まままままままま  
し白極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
回極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
意を極極極極極極極極極極極極極  
是極極極極極極極極極極極極極極  
て極極極極極極極極極極極極極極

ハ一極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
七極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極

極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極

世人此の極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極  
極極極極極極極極極極極極極極





















秋の月... 月三十日

あつしと月... 月三十日

あつしと月... 月三十日

四季 竹 皆 哉 寺 己 行 天 京

埋火... 埋火

うるめ... うるめ

口切... 口切

兼二冬物... 兼二冬物

懐爐... 懐爐

芝漬... 芝漬

野... 野

角鷹... 角鷹

鯨突... 鯨突

やハツ千の花... やハツ千の花

兼二冬物... 兼二冬物

山眠... 山眠

七 松風の時雨



部類 俗語 時言 新言 古言

大徳... 舟のりや船... 顔の... 舟のりや船... 顔の... 舟のりや船... 顔の...

け 玄 楮... 水官解厄... ふ 冬牡丹... 兼 三冬物... 袞... 下元...

四季 作者 歳寺 巳 所 長 京... 舟のりや船... 顔の... 舟のりや船... 顔の...

吹 大 根... 河 豚 魚... 柴 漬... 風 呂... 吹 大 根... 河 豚 魚... 柴 漬... 風 呂...







親と子に似たり終は花種の酒全下  
人よあまの母と稱すの波下ふふ  
山手ゆき若咲うぬの幽閑うぬ  
後亦たれしあうてふま花の夜  
あまの母も後種何ともまの  
なるまの母もあまの母のりる音

初夏  
あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音

青島老人のまのりる音  
あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音

あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音

韓氏外傳 凡草木の花多し五出者花種六出 采子語  
録地六の草の成数多し水花以て花をあを故の出入

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸  
● 活の吸 活の吸 活の吸 活の吸

あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音

あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音  
あまの母もあまの母のりる音

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣

物 粟 水鳥 鷓鴣



陣中申の結ぶて結ぶて結ぶて... 引立てて... 直垂をぬぐ... 中かしの幕... 孫の花...

初秋

ちうら 耶和麻州河の秋の風... 振の世... 仙生... 朝向の... 隣ある...

鴉

初雁一丈... 鴉の如し... 龍河... 又美鶴ある... 此の部...

養二冬物 氷魚

任智の... 圓上... 氷魚の使... 養二冬物... 氷魚... 使...

冬旬

廿日 神社... 冬旬... 世... 世... 世... 世...

廿日 神社... 冬旬... 世... 世... 世... 世... 世... 世...

冬物 杉焼... 杉の... 杉焼... 杉... 杉...

炭 小野炭... 池田炭... 炭... 炭... 炭...

仲秋... 石物の音... 四季... 仲秋... 仲秋...











度神も... 伊弉册田言新集... 度神も... 伊弉册田言新集... 度神も... 伊弉册田言新集...

度神も... 伊弉册田言新集... 度神も... 伊弉册田言新集... 度神も... 伊弉册田言新集...

ね子祭 子祭

お宗 お宗

像祭 像祭

うさ笑の梅 うさ笑の梅

うさ笑祭 うさ笑祭

探梅 探梅

え 獻履 え 獻履

空也忌 空也忌

空也上... 空也堂... 空也堂... 空也堂... 空也堂...













船の重く尾よの好く約なり 廿九  
あまて二羽海やうりや 孤  
船多の日備揚る見い吹く 角  
月あまらるる四鷹の門 角  
船又うまのや編もなまをるる  
はなれさるるは太形に 角  
あまらるる海の妻よさしにして 角  
船重の重くも重なり 角  
魚の味も守してゑるハツたり 角  
息吹うまも重なり 角  
田の味も守らばはるる 角  
さまのたむらふ重なり 角  
行脚の引申しおまをり 角  
顔も守るる重なり 角  
船多の日備揚る見い吹く 角  
あまらるる海の妻よさしにして 角  
船重の重くも重なり 角  
魚の味も守してゑるハツたり 角  
息吹うまも重なり 角  
田の味も守らばはるる 角  
さまのたむらふ重なり 角  
行脚の引申しおまをり 角  
顔も守るる重なり 角  
船多の日備揚る見い吹く 角

神類... 廿九

之修も神人一人これに従ふ **た** 大徳寺宗

山忌 廿二日 大徳寺... 廿九

鯛味噌 鯛味噌の肉味噌と同しく **鯛** 船

敷 船... 廿九

追餅 鬼やられ **追餅** 鬼やられ

餅 船... 廿九

ね 船... 廿九

な 船... 廿九

お 船... 廿九

ぬ 船... 廿九

な 船... 廿九

おのしの子は思はせむと 廿九  
あまらるる海の妻よさしにして 角  
船重の重くも重なり 角  
魚の味も守してゑるハツたり 角  
息吹うまも重なり 角  
田の味も守らばはるる 角  
さまのたむらふ重なり 角  
行脚の引申しおまをり 角  
顔も守るる重なり 角  
船多の日備揚る見い吹く 角  
あまらるる海の妻よさしにして 角  
船重の重くも重なり 角  
魚の味も守してゑるハツたり 角  
息吹うまも重なり 角  
田の味も守らばはるる 角  
さまのたむらふ重なり 角  
行脚の引申しおまをり 角  
顔も守るる重なり 角  
船多の日備揚る見い吹く 角

温糟粥 船... 廿九  
おのしの子は思はせむと 廿九  
あまらるる海の妻よさしにして 角  
船重の重くも重なり 角  
魚の味も守してゑるハツたり 角  
息吹うまも重なり 角  
田の味も守らばはるる 角  
さまのたむらふ重なり 角  
行脚の引申しおまをり 角  
顔も守るる重なり 角  
船多の日備揚る見い吹く 角  
あまらるる海の妻よさしにして 角  
船重の重くも重なり 角  
魚の味も守してゑるハツたり 角  
息吹うまも重なり 角  
田の味も守らばはるる 角  
さまのたむらふ重なり 角  
行脚の引申しおまをり 角  
顔も守るる重なり 角  
船多の日備揚る見い吹く 角



目的のあらふ人は志すそ之を孤...  
下巻を一舟渡りおけしむ...  
身にあつて風もあつて...  
...  
川をくだりて水が清く...  
...  
昔の...  
...

物まひたりしと親かき...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...  
...

他誌七部集終

〇...  
...  
五條天神祭  
...  
...

て天智天皇御國忌  
...  
...

勝寺灌頂

十五日 名勝志 土人云最勝寺の...  
...

齋宮の繪馬  
...  
...

歳藏市  
...  
...

め和布刈の神事  
...  
...

川流のまろくは藤也糖子の色 茶丸

料理場やうり大根を狭めて 新湯

車のはまを堆け 川

妙の似た肩へうけ 昔の月

○下巻

江戸はささぐさのうろ 杜若香 節

江戸はささぐさのうろ 杜若香 節

さくさく減床の息のゆく宛切て

さくさく減床の息のゆく宛切て

○下巻

一里やうとくならん 兄へて相志 茶丸

たましし潮をさくさくさくさく 止

たましし潮をさくさくさくさく 止

又らうさくさくさくさく 止

有るのより 止

おもしろい 止

○下巻

江戸はささぐさのうろ 杜若香 節

江戸はささぐさのうろ 杜若香 節

市立と誰人 止

市立と誰人 止

○下巻

おれや 止

おれや 止

川流のまろくは藤也糖子の色 茶丸

川流のまろくは藤也糖子の色 茶丸

四季 止

一巨石 何と石 固く 相をうつ前 謂 後 尊 神

厨 あり 謂 殿 の 下 石 あり 俗 言 建 身 持 出 出

ハ 石 燈 あり 海 の 底 へ 建 身 持 出 出

窮 心 十 二 月 月 あり 四 更 三 夜 夜 常 常 常 常

て 謂 志 推 一 炬 石 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈 燈

爾 終 末 謂 あり 元 且 新 布 神 前 眞 一 既

ひらる 二 年 元 滅 人 伸 一 割 至 三 年 兼 和

水 朝 會 觀 聖 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙

中 之 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫

三 四 八 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫 太 夫

俳 諧 賦 時 記 此 の 月 末 の 日 志 志 志 志 志 志 志 志

行 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或 或

日 月 事 始 十 三 日 二 月 事 始 十 三 日 二 月 事 始

用 多 物 多 物 多 物 多 物 多 物 多 物 多 物 多 物

ら 齒 引 魘 除 年 始 十 三 日 二 月 事 始 十 三 日

の 子 大 和 本 子 和 本 子 和 本 子 和 本 子 和 本 子

餅 春 餅 春 餅 春 餅 春 餅 春 餅 春 餅 春 餅 春 餅

の 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅

を 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都 都

の 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅

の 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅 餅



解と詠と通せしものありしと云ふ可き琴菊ハ其れし  
世説の本文ハ侯白母俳諧ト云ふ、冥寒一笑七之卷  
小引多クモ俳諧ト云ふハ詠ハ詠詠誤ありと徴し、  
支考十論ニ蕉家の書法ハ人扁の俳詠を用ふ  
爲しと云ふも概あり

俳諧之連歌權輿

詩家ハ俳諧体ありと做して和歌ハ俳諧体を多し  
亦古まじく做して連歌ハ俳諧体ありと云ふ俳諧連歌  
の始ト云ふ許六十四卷俳諧筑波回答云ハ俳諧尊伴并冊  
尊はハ了てそのすくを乃時伴并諾尊何ふれし云  
也ハ俳し和せぬハ何れぬト云ふハ俳詠ハ其れなりと

あなうそをしそやうのしあやこふ何れぬと云ふたぬ  
是連歌一のけん免とや或ハ日本武尊東夷征伐の時  
甲斐の國酒折の宮と云ふ、珥比磨利菟久波平領擬  
底以久用加祢菟流と何そをそれ多禮ハ多しと云ふ童ら  
加感奈陪底用珥波虚々能用比珥波菟鳩と付たり是  
連歌すけけめと云ふと云ふ是贈答の音と云ふ文字は新也  
さるものありぬハ云ふて連歌のちしめと云ふは金くまの  
初免と云ふハ美奈集第八尼作頭句并大伴宿禰家持  
所詠尼續末句等一首  
修保川之水平塞上而植之田平 尼作

并流早飯者猶奈信思 亦持續

是連歌ありと云ふれと詞書のニ續末句等一首と云ふを  
ハ作者を二名あるも哥ハ一首なり然れハ今の連歌ハ

おのりいり江 菟玖波集

雜体連哥之部 俳諧とる条

奥山より船こく者やきこゆ

あるまじくつらう貫之こき小續てあるまじく末の実やうわつた

らむ又あやしくも勝りの上のやもふく好くしるく実方

朝臣こきに越のこりりの雪やふるんと附らほしあはく番

時まかりすの依禱祭句のけし先とよふ同上 片句連哥

男里戸のくこ音まあり 堀川院 御製 去々 俳諧十論 文明のけきん

山寺宗鑑法師ハそ世に依禱の名何と守武望一と

そきをきりて百韻をつとま十句をほくし貞徳貞室ハ

宗匠の名何とく唯依禱の言語を清くら務しし貞室ハ

そ吉世山の花をほくし おのりいり江 花の芳野山貞室 隅田川の鳥吟して

そししとやそんそ後難波の宗因ハ武殊檀林の額をう

さて依禱乃淫覓ハ破りるまきと耳とそ語乃わらししそ代

得く眼姿情けさそしそをまきしそ まきしそ まきしそ まきしそ

おのりいり江 おのりいり江 おのりいり江 おのりいり江

芭蕉菴の叟一日塔焉としてふふ日風雅の世に行りまくる

そ多衣とそありてそふとそまきそそ必中間の一

理何とくしそそ由を武江の北に因るそ雨聲ノド

始りそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ

そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ



山吹也の五文字を冠しし多むりくあやまらば侍の年  
吟古也とすいすいすいすいすいすいすいすいすいすい  
吟古也とすいすいすいすいすいすいすいすいすいすい  
吟古也とすいすいすいすいすいすいすいすいすいすい

倭語書目記 寛永二十五年  
十二月五日 松平貞徳洛陽如法寺本文坊  
於て倭語の文字を立是佛指の式を定る鼻祖也とて  
云々之ハ歌と樂と樂之定るハ申樂之倭語ハ今之  
云々原ハ其ハつあましくも新古のまゝハあま羅文  
道之如く達之方き神道之まゝハ倭語ハ佛法ハ  
此言大ニ可方也ハあまい

詩ニ極句狂歌等々書る事ハ倭語体ニシテ  
三ニ三ニ三ニ三ニ三ニ三ニ三ニ三ニ三ニ三ニ三

雨傘 怨 明

有懐 市葉 意 世 情 亦 伴 弟 伴 弟 亦 伴 弟  
在 門 傍

燈 輝 吹 中

以 筆 兼 唇 勒 海 新 玉 鏡 斜 遥 看 烟 裡 面 大 似  
霧 中 花

支以盜牛犯罪書上縣尹詩

洗面盆為鏡梳頭水者油妻身能濟女支例 言 葉  
牛

倭語体和歌

古今  
秋風在御道... 女... 入... 夫... 妻... 夫... 妻... 夫... 妻... 夫... 妻...  
秋風在御道... 女... 入... 夫... 妻... 夫... 妻... 夫... 妻... 夫... 妻... 夫... 妻...

俳諧之大意

俳諧の名ハ史記は滑稽傳より古今集にけしきを連  
 歌にうらましくとり宗鑑を茶の守武を学ひ俳諧の詞を弘  
 するもれと一座の真なりを撰じて今の俳所の海情はけし  
 且  
 俳諧の心を傳へる人あまたあるも蕉の著俳諧古今はし  
 とくをてを奉りて人よりさくやさく宗訓乃秘文とてありぬ  
 中興する俳諧の心とて虚実の自在なる世間の理屈を放  
 き風雅遊をも云遊とて余何を世情の人和る五倫の事法  
 としてあらしまは俳諧の名と知てく俳諧は風雅の体と知  
 道し人々々々妙三ツを高く討ハ身平重の羅綾を誦するも蕉  
 一牧のたまををよききけいハ八珍の菓者をけしぬと一瓢の飲  
 の樂をを思ひん世上の憂をわけて笑言を耳をたてしむる

俳諧自在の人とのありしは能く多しこややう哉  
 ますくくくく俳諧の心はゆるゆる時を産を破るも業を怠る  
 しく入るも名もなきくありて世法の一助ありし

終之 （銅四録）

世に傳世書多し一々其類題は親の最も  
良撰多し其時記ふ然るに實に傳家の禁冊初学の  
の書多しと多し其類題は作例を求むる法要鑑  
を穿く七部集も傳世なり其法を考ふに歴世を嗣  
于明治の今に於て親の傳世の纂冊少からん然  
中一考札梅言或は漢の書多し又東武に  
有るもの宗匠その他一考の風士に集るる書も亦新  
しき風體を以て後を考ふに初学の階梯と云ふも  
此道乃ち重寶なる書也又多く採りし如く彼の書時  
記を幹としし四孝初学を考ふる教養古今名句  
の書を以て採り此書も亦多し其類題は初学を以て

鍾風自出の可し此編を需めらるる書也其法を考  
ふに願ふに在りし以て新葉草と云ふ計廻回録  
の書多し其類題は初学と云ふ一考の地書を以て採り  
た鑑ししもの多し其類題は博覧の君子と云ふ類編を以  
て採りて法を以て賜ふに幸甚之と云ふ也

明治十五年 對川舎 素 楊 儀



附錄

明治十四年十二月廿四日出版之權御願  
同十五年二月四日版權免許  
同 辛六月刻成發兌

定價七拾五錢

京都府平民

編輯者 山口 素 楊

下京區茅六組大黒町  
三拾四番地



京都府平民

出版人 風月莊左衛門

上京區第廿八組大恩寺町  
貳百四十八番地



京都府西門外  
山口素楊

